
血涙 My Summer

青春太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血涙 My Summer

【Nコード】

N5681J

【作者名】

青春太郎

【あらすじ】

この世界に起こる怪奇現象の原因『歪み』を破壊する。

それが僕の仕事であり、使命であり、運命だと思う。

この話は僕と事務所の方々と二人の姉妹の血と涙の夏の物語。

第一章『出会いは依頼』（前書き）

春に僕の人生を変える壮絶な出来事が起こった。

それは悲しく儚い一時の思い出になった。

そしてこれから始まるのは一人の人間の血と涙の夏の物語。

第一章『出会いは依頼』

頬からいくつもの汗が流れる。

今日は今年で一番の猛暑らしい。

僕の歳は18歳。普通なら高校に行っている歳んだけどある事情で高校は中退。

今、僕は町でも知る人は少ない神社に向かっていた。

木のおかげで影があるため周りよりも涼しく影からは出たくない気分だがそう言う訳にもいかなかった。

「確かこの辺りだと思っただけだな」

誰も居ない古びた神社に目を向けながら呟いた。

神社の近くには大きな松の木が立っていた。

僕が産まれる何百年も前からあったであろう松の木は今蝉に泣き場所を与える存在になっている。

ふと、松の木の横の木々に目がいく。

「視つけた」そこには何も無い木漏れ日のある涼しげな場所に普通の人にはそう見えるはずだ。

でも、僕は普通じゃない…

立ち止まり目の前の『歪み』に触れる。

そう、世界の『歪み』に。

『歪み』とは神様であったり、悪魔であったり、妖怪であったり、幻獣であったりと多種多様の世界にとっての異質な者の入り口。

それは人を幸福にするものもあれば、不幸にするものもある。

その『歪み』を無くすのが僕の仕事。

「これだけ小さければこれで大丈夫かな」

事務所支給品の変な柄の御札を『歪み』の地面に貼り付ける。

「よし。終わり」

普段よりも大きな音量で言い、ポケットから仕事用の携帯を取り出

す。

ダイヤルをして3コール目

「……あ、もしもし……仕事してましたか？『歪み』を発見したんで一応、閉じときましたから、リストに追加しといてください。……依頼の迷子の猫？僕達の仕事は『歪み』を無くすことですよ。……それだけじゃ食って生けない？知りません！！……寝るなこら！………お願いします」

仕事用なので通話料は取られないからかなりの長電話。携帯をしまいつつ神社の石段を下っていく。

そういえば仕事場の看板は探偵事務所だったかもしれない。やれやれ就職するところ間違えたかな。

階段を下り終え停めておいた自転車にまたがり、いざ！発し -

「新宮君？新宮君だよね？」

かん高い声が僕の競輪選手すら恐るスタートの邪魔をする。嘘ですけどね。

聞き覚えのある声に振り向くとそこには制服を着た腰まであるようなロングヘヤーの女性がコチラに微笑みかけていた。

「こんなところで何してるの？」

もう一度言おう。

僕は高校中退……

ここで「野火 陽華」について話したいと思う。

彼女は僕が去年まで通っていた高校の三年生で本来なら僕と同級生だ。

確か部活動はしておらず二年の時と一緒に図書委員をしていた記憶がある。

成績はかなり良く期末テストでは全教科学年10位以内だったと思う。

そんな優等生が僕の目の前に立っていた。

「お久しぶりですね野火さん。学校はどうしたんですか？」野火さんの質問を無視してコチラが質問してみる。

「今日はテストだったから午前中までだったの。それよりも、ここで何してたの？」

再び同じことを聞いてくる。

どうしようかな。できれば言いたくないしな。

「野火さんこそこんなところで何してるんですか？」っと誤魔化してみる。

「私の帰り道はこっちな。いい加減、私の質問に答えてよ」

野火さんは少し声を荒げて言った。

言っしかなさそうなので仕方なく自分の懐から名刺を取りだし、手渡す。

「中々探偵事務所。新宮君、探偵しているの？」

だから、嫌なんだよ…

「まあ、探偵と言うよりも何でも屋みたいなものです」

「それでもすごいよ。驚いたな」。もう将来の道決まってるなんて尊敬するわ」

そんな輝いた眼で見られると心が痛い。

僕だっしてたくて就いた職じゃないのに。

「それだったら一つ相談していい？」

いまだに輝いた眼で見て話してくる。

…大体分かる。これはめんどくさい事件を持ってこようとしている。そんな感情を顔にだしてみようとしたがうまくできなかったのか、察してくれなかったのか、話を進めてくる成績優秀者。

「最近ね、目が悪いのか分からないんだけど時々視野がぶれることがあるの」

「ぶれるって空間が吸い込まれた様に見える？」

「うん。よくわかったね」

ほらね。やっぱり事件が起こった。

空間が吸い込まれた様に見えるのは『歪み』が視えていると同じことだから。

まあ、それが仕事だから真面目にやるべきだよな。

思いながら彼女に、これまた事務所支給品の特製お守りをプレゼント。

「なにこれ…。こんなので治るの？」

「こんなのとは失礼な。普通に買えば一万円は超える品物ですよ」
テレフォンショッピングぽく言ってみた。

野火さんは「嘘おー！」とか驚嘆の声を出していた。

「で、何時から視えるようになったんですか？」

少しだけ腰を入れて仕事を試みる。

「えーと。5日前ぐらいかな」

5日前か…。ぎりぎりだったと思う。もう少し遅ければ『歪み』の事件に巻き込まれていたかもしれない。

「うん、わかった。ありがとう。そのお守りを絶対に肌身離さず持っていたら、大丈夫だと思うよ」

自分の仕事を減らす為にも詳しく説明をしておく。

「じゃあ一応信じとくね。あつ！料金は幾らぐらい？」

「効果が現れてから請求するよ」

話が長引いて体内温度が高くなってきたので早めに話を終わらそうとしてみる。

「そう？だったら携帯の番号教えて」

「バイバイ野火さん！」

自転車にまたがり強くサドルを蹴り一気にスピードに乗る。
人との関係を深く持つなんてまっぴら御免だ。

「新宮君ー！」

大声で後ろから叫んでくる。

暑いのに元気な人だ…。

「これから私のことは陽華って呼んでねー！」

聞き間違えがなければそう聞こえた。

なんだろう？僕は親しくなるようなことをしただろうか。

中学二年のように話してきた女子がみんな自分に好意を寄せている
と思っている状態に入り込んだ。

まあ、冗談ですけどね。

そんなことを考えていると自転車が自分の働く事務所に到着した。

事務所は二階建てになっており一階のガレージに自転車を停め、錆
びきっている階段を上り始めた所で思い出した。

野火 陽華には双子の妹がいたんだった。

第一章『出会いは依頼』（後書き）

誤字が酷かったので直させてもらいました。
すいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5681j/>

血涙 My Summer

2010年10月9日06時33分発行